

<全体分析>

試験時間 120 分

解答形式

客観式，記述式

分量・難易（前年比較） 分量（減少・変化なし・増加） 難易（易化・変化なし・難化）

出題の特徴

読解総合：英文和訳，内容説明（部分要約），空所補充（適語選択）

英作文：自由英作文（会話文）を含む

その他トピックス

読解問題において，昨年度に続いて空所補充問題が出題されるとともに，内容説明問題として部分要約的な問題が出題された。和訳問題中に指示内容の説明を求める問いが出題された。英作文では，昨年度に引き続き，和文英訳に加えて対話文を用いた自由英作文が1題出題された。

<大問分析>

番号	区分	出題分野・テーマ	コメント（設問内容・答案作成上のポイントなど）	難易度
I	読解総合	「西洋人の抱く『砂漠化』のイメージとそれが及ぼす影響」 (532words)	(1) 第1パラグラフ第2文が解答の該当箇所となる。あとは estimates を踏まえること。 (2) As such については，直前の Desertification...に始まる一文の because 以下が該当箇所となる。the way(S)...shaped(V)...our reactions...(O)という基本構造をとらえることができたかどうか成否を分けるポイントとなる。conceptualized ; framed ; tackled は並列関係にある。framed は訳出に苦労しそう。 (3) The assumption...(S) has led(V)...to programs and policies という基本構造をとらえることが成否を分けるポイント。assumption の直後の同格の that 節の領域の判断が難しい。worthless と deforested はいずれも landscapes を修飾する。that have...は programs and policies を先行詞とする関係代名詞節。marginalize ; indigenous はいずれも難度が高いが，marginalize は 2016 年度の前期大問 I で出題された margin の動詞形。	やや難

II	読解総合	「なぜ人は今を生 きることに恐怖を 覚えるのか」 (564words)	(1) 近年出題が続いている空所補充問題。一昨年度が語形変化を伴う動詞の空所補充、昨年度は形容詞の空所補充であったのに対して、今年度は副詞を中心にした空所補充問題であった。解答にあたっては前後の文脈を正確に把握することが求められており、(エ)はやや難しい。 (2) 従来型の下線部和訳問題。文構造把握の観点からは並列のコンマや ranging 以下の修飾要素の処理がポイント。語句レベルでは、immersion ; range from A to B ; the Hereafter ; fall somewhere in between などの訳出でやや力の差が出るか。全体的に見れば平易な問題であった。 (3) 直接的には下線部直後の1文と、本文最終パラグラフ第1文の内容をまとめればよいが、それぞれ難語も含まれており、その意味が分からなかった場合には該当箇所以降の記述を参照して推測する必要がある。なお、this fear は our fear of living fully in the present ということ。	やや難
III	英作文	「情報発信する際の心得」	第1文は、「生兵法は大怪我のもとというが」という書き方からも分かるように、「生兵法は大怪我のもと」はそのものずばりの表現が欲しい。また、「が」の処理にも注意が必要。「…できる時代」を関係詞節で表す場合は非制限用法となる（最終文の「…手に入る世の中」も同様）。第2文では、「聞きかじった知識」自体の表記、それに続く「さも自分で考えたかのように」とのつながりを考えた英訳が難しい。第4文では、「…手に入る世の中」のほか、この日本文全体の内容を正しく把握した上で、「確かな知識を身に付ける」の部分を英訳する必要がある。	やや難
IV	英作文	「音楽に国境はあるか」	(1)には「音楽に国境はない」と考える理由を、(2)には「音楽にも国境がある」と考える理由を書く。(1)は比較的書きやすいかもしれないが、(2)で手が止まる可能性がある。「音楽も文化の一部なので、文化が違えば理解に差が生じる」「歌詞(lyrics)が理解できて初めて音楽が真に理解できる」などといった内容が考えられる。	やや難

注：区分は「英文解釈」「読解総合」「英作文」「文法・語法」「聞き取り」「その他」

難易度は5段階「難・やや難・標準・やや易・易」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

読解問題では本年は大問Ⅱで和訳以外にパラグラフ要約的問題が出題された。一方、大問Ⅱの空所補充は、discourse marker などを入れることが求められ、ダミーもあってやや難しいものであった。和訳問題は特に例年と変わらないが、構造を把握できないとかなりの失点となる出題。英文のテキスト自体は、2題とも基本的に従来の英文和訳問題のそれと変わっておらず、難しいものの興味深い内容である。従来型の精読問題の勉強法を大きく変える必要はなく、過去問に目を通すことにも十分意義はある。精読に加えて和訳以外の記述、特に「まとめる」演習を今後は心がけたい。

英作文で昨年度に続いて出題された、以前の東京大学の入試で見られた対話文完成型の自由英作文は、前後をよく読み、書く内容を確定したのち、おおむね40語前後でまとめることが求められる。この形式の問題では、書くべき内容を外すと、英語以前の段階で点がなくなってしまうので、注意が必要である。東京大学の過去問などを参考に、まず内容で減点されないように訓練することが必要である。積極的に添削指導を受けることが望ましい。従来型の問題も相変わらず出題されているので、過去問研究も怠らないこと。